

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

エジプト・アラビア語のWh疑問文の語順と語順変化 : コプト語影響説の再検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): Arabic, Egyptian Arabic, Coptic, language contact, word order change, Whquestion 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003915

エジプト・アラビア語のWh疑問文の語順と語順変化

—コプト語影響説の再検討—

西尾哲夫*

Word order and word order change of Wh-questions in Egyptian Arabic:
the Coptic substratum reconsidered

Tetsuo Nishio

エジプト・アラビア語（カイロ方言）はWh疑問文の語順に関して古典アラビア語や現代標準アラビア語，さらに他の諸方言にはみられない特徴を持っている。エジプト・アラビア語以外のアラビア語では，Wh疑問文の疑問詞は文頭の位置に移動するのが普通だが，エジプト・アラビア語においては，本来の平叙文の後部の位置にとどまるWh疑問文が多用される。このような疑問文をコプト語の影響とみなす説が提唱されたが，いまだにその妥当性に関して結論は出していない。本稿では，エジプト・アラビア語とコプト語の基本語順や話題化・焦点化などの一般的な語順をめぐる統語規則との関連で，各言語のWh疑問詞に関して生起環境や統語規則をシステムとして比較し，コプト語影響説の是非を検討する。Wh疑問文の語順変化におけるコプト語の影響は独占的なものではなく，エジプト・アラビア語の基本語順がVSOからSVOへ変化する中で，話題化や焦点化という統語規則の面で新たな統語構造が必要になってきた時に，コプト語の統語規則が当該の言語変化を促進させたことを明らかにし，エジプト・アラビア語に起った通時的な統語変化の仮説的段階を再構する。

As far as the word order of Wh-questions is concerned, Egyptian Arabic (especially the Cairene dialect) is different from other Arabic varieties, including Classical Arabic and Modern Standard Arabic. In most Arabic dialects, the interrogative particle of the Wh-question moves to the initial position in the sentence concerned, whereas in Egyptian Arabic, postposed Wh

*国立民族学博物館民族文化研究部

Key Words : Arabic, Egyptian Arabic, Coptic, language contact, word order change, Wh-question

キーワード : アラビア語, エジプト・アラビア語, コプト語, 言語接触, 語順変化, Wh疑問文

interrogative sentences are mainly used. Many scholars have considered that this word order resulted from the syntactic influence of the Coptic language, but the validity of this proposal remains to be discussed. In the following, we will first discuss the basic word order in both Egyptian Arabic and Coptic, in terms of syntactic rules, such as topicalization and focalization, and then we will compare the syntactic rules of the Wh-questions as a system, in order to examine the validity of the Coptic influence theory. The basic word order of Egyptian Arabic has changed from VSO to SVO, with the result that some new syntactic structure became necessary in order to mark a topicalized element or a focused element, and the syntactic rules of Coptic interrogative sentences promoted to some extent the language change concerned. The hypothetical word order patterns of Wh-questions will be reconstructed for the pre-modern diachronic stage of Egyptian Arabic.

1 はじめに	5.2.2 Wh-in-comp 疑問文
2 エジプトにおけるアラビア語とコプト語の歴史	5.3 Wh 疑問文の生起制限と文法構造
3 コプト語影響説とその問題点	6 コプト語の Wh 疑問文
4 エジプト・アラビア語とコプト語の疑問詞形の比較	6.1 コプト語の基本語順
5 エジプト・アラビア語の Wh 疑問文	6.2 コプト語の Wh 疑問文の語順
5.1 エジプト・アラビア語の基本語順	7 Wh 疑問文の語順変化の通時的分析
5.2 エジプト・アラビア語の Wh 疑問文の語順	7.1 Wh 疑問文の語順の比較
5.2.1 Wh-in-situ 疑問文	7.2 言語史的証拠
	8 おわりに

略語表

sg=singular (単数形)

du=dual (双数形)

pl=plural (複数形)

m=male (男性形)

f=feminine (女性形)

c=common gender (男女同形)

nom=nominative (主格)

acc=accusative (対格)

gen=genitive (属格)

S=Subject (主語)

V=Verb (動詞)

O=Object (目的語)

Ad=Adverb (副詞)

T=Topic (話題語)

F=Focus (焦点語)

pro~p=pronoun (代名詞)

rel=relative (関係詞)

Pf=Perfect (完了形)

Impf=Imperfect (未完了形)

Cl.A=Classical Arabic (古典アラビア語)

Eg.Ar=Egyptian Arabic (エジプト・アラビア語, アラビア語エジプト方言)

1 はじめに¹⁾

エジプト・アラビア語(カイロ方言)はWh疑問文の語順に関して他の現代アラビア語諸方言にはみられない特徴を持っている。古典アラビア語や現代標準アラビア語をふくめた、エジプト・アラビア語以外のアラビア語の統語規則では、Wh疑問文の疑問詞は文頭の位置に移動するのが普通だが、エジプト・アラビア語においては、文頭に移動する語順のWh疑問文(いわゆるWh-in-comp疑問文)だけでなく、移動せずに疑問詞になった元の主語や目的語、あるいは場所や時間などの副詞的要素が占めていた後部の統語位置にとどまるWh疑問文(いわゆるWh-in-situ疑問文)も通常のWh疑問文として多用する。このようなエジプト・アラビア語のWh-in-situ疑問文の存在をコプト語の影響とみなす説が提唱されたが、いまだにその妥当性に関して結論は出ていない。

本稿では、エジプトにおけるコプト語とアラビア語の言語接触について歴史的に概観したのち、これまでのコプト語影響説を検討し、その問題点を指摘する。古典アラ

ビア語と現代エジプト・アラビア語、そしてコプト語の Wh 疑問文の統語特徴を比較することになるが、これまでの議論で行なわれてきたような単純な Wh 疑問文だけの語順の比較検討ではなく、それぞれの言語における基本語順や話題化、焦点化などの一般的な語順をめぐる統語規則を明らかにした上で、各言語の各々の Wh 疑問詞に関して生起環境や統語規則をシステムとして比較する。最後にエジプト・アラビア語へのコプト語からの影響を考慮し、現代エジプト・アラビア語の状況を総合的に説明するために、通時的な統語変化の仮説的段階を再構する。

2 エジプトにおけるアラビア語とコプト語の歴史

アラビア語を話すアラブの軍隊によってエジプトが征服され、イスラム化される西暦7世紀以前においても、アラビア語を話すベドウィン部族の一部がエジプト側に進出し、古代エジプト語、その末裔であるコプト語を話す人びとと日常的に接触した可能性は高い。もっとも、言語間の接触に限れば、部分的な語彙の借用レベルにとどまり、双方の言語自体の構造が変化するほどの規模ではなかったと推定される(池田1985; ‘Umar 1970)。ただし、アラビア語とコプト語に見られるラクダや水を表す基本単語の類似は、単なる借用というよりもアフロ・アジア祖語(セム・ハム祖語)の段階までさかのぼれる可能性が高い。

征服当時のエジプトでは、住民の大部分はコプト語を話しており、行政用語としてはギリシア語が使われていた。エジプトにおけるイスラム征服初期の人口構成について正確なことはわからないが、コプト語人口は五百万人程度、アラビア語人口(アラブ軍とその家族)は数万人程度であったと推定される²⁾。たとえば、640年にアムル・ブン・アルアースが率いたエジプト征服軍は四千人規模であったが、後に一万二千人程度に増強されたとされる。また、初期のアレキサンドリアにおけるディーワーン(アラブ戦士への俸給支給用登録簿)への登録数は、およそ一万二千人であった(Donner 1981)。アラブの軍隊は基本的に征服地域の都市部に住みつつか、もしくは、ミスル(miṣr)とよばれる軍事前線都市を建設した³⁾。エジプトにおいても同じ状況であり、アラブ軍やその家族は都市部に定住した⁴⁾。軍事前線都市として建設されたフスタート(al-Fuṣṭāt)には、すぐにコプト語を話す人びとが移住してきた。農村部については、少なくとも征服後一世紀の間はジズヤ(人頭税)の徴収源として放置しておいたという理由もあり、アラブ人の入植は少なかった。当初はアラブ側によるアラビア語強要政策が行われなかったこともあり、都市部でのアラビア語とコプト語の

言語接触は起こりえたにしても、アラビア語化はそれほど進まなかったと推定される。イスラム教の聖典『コーラン（クルアーン）』の言葉がアラビア語である以上、被征服地域ではイスラム化とアラビア語化が同時進行したと推察される。ただし、キリスト教徒やユダヤ教徒は、ジズヤを課税されながらも保護民（ズインミー）としてイスラム法上での地位を保証されていたから、アラビア語化進行の理由としては、イスラム教への改宗という宗教的側面よりは、アラビア語がイスラム帝国の公用や商取引のための共通語として地位を確立したからであるという実務的もしくは功利的な側面が先行した感が強い（Anawati 1975）。

9世紀には、アラブ側の政策としてアラビア語が公用語として官庁で使われるようになり、コプト語を話していた上層部の人びともアラビア語を使うようになった。当初はアラビア語とコプト語やギリシア語が併用されていたが、10世紀以降はアラビア語化が進み、イスラム教徒と非イスラム教徒を問わず、アラビア語は学問や文芸の言語として定着していった。やがて、コプト教徒もアラビア語で著作をするようになった⁵⁾。11世紀ごろにはデルタ地域の都市部を中心とするアラビア語化が終わり、12世紀までにはほとんどすべてのエジプト人がアラビア語を母語として話すようになった。ただし、上エジプトではアラビア語化が幾分遅れ、その後の数世紀に渡って一部の地域では14世紀ごろまでコプト語が使われていた可能性が高い。信憑性は低いものの、16世紀になってもコプト語が話されていたとする史料もあるが⁶⁾、おそらくともそのころまでには、コプト語は日常的に使う母語としての役目を終え、現在と同様にコプト教の典礼用語として使われるだけになったと推定される⁷⁾。イスラムによるエジプト征服後、アラビア語化開始のほぼ300年後には、地域的な差はあるもののエジプトのアラビア語化は終わったと言えるだろう（Bishai 1963）。

3 コプト語影響説とその問題点

エジプトにおけるアラビア語とコプト語の言語接触の問題については、これまでも比較的多くの研究者があつてきた⁸⁾。ただし、そのほとんどは、コプト語からエジプトのアラビア語方言への語彙面での借用をあつかったものであり（Sobhy 1950; Petráček 1956; Bishai 1964; Ishāq 1975; Behnstedt 1981）、音韻論や形態論、統語論に関するコプト語からの影響をあつかったものは少ない⁹⁾。

形態論および統語論におけるコプト語のエジプト・アラビア語への影響についての論考のなかで、ビシャーイーは、次の5つの文法特徴についてはコプト語からの影響

を受けた結果であるとしている (Bishai 1961; 1962)¹⁰⁾。

(1) 「mā + 命令形」における接頭辞的 mā の使用

例： ma tiktub 「書け！」(エジプト・アラビア語)
matamio 「作れ！」(コプト語)

(2) 「'a + 人称代名詞 + 完了形」における過去時制標示として 'a の使用

例： 'a hu simi 「彼は聞いた」(エジプト・アラビア語)
afsōtm 「彼は聞いた」(コプト語)

(3) 強調構文における指示代名詞の使用

例： da (a)na l-malik 「私は王です」(エジプト・アラビア語)
anok pe prro 「私は王です」(コプト語)

(4) 比較構文として「形容詞 + 'an」の使用

例： huwa kibīr 'anni 「彼は私より大きい」(エジプト・アラビア語)
nītof noc e pai 「彼はこちらより偉大である」(コプト語)

(5) Wh 疑問文における疑問詞の語順

パルヴァは、(1) の接頭辞 ma はアラビア語の否定辞 mā であり、(2) についてもアラビア語 (あるいはセム語) に一般的な呼びかけ語の転用であり、どちらの場合もコプト語からの影響ではなく、エジプト・アラビア語の内的な統語変化によるものであるとして、説得力のある議論を展開している (Palva 1969)。

ここで議論の対象としている (5) の Wh 疑問文の語順については、エジプト・アラビア語に対するコプト語の影響を初めて言語学的にあつかったプラエトリウスが指摘している (Praetorius 1901)。後のリットマンもこれを支持したが (Littmann 1902)、ガルティエは影響説を真っ向から否定した (Galtier 1902)¹¹⁾。オリーリーは、より言語学的な立場から影響説を否定している (O'Leary 1934)。彼によればアラビア語カイロ方言に見られる特徴は、ある程度までは古典アラビア語のなかにも観察できるものであり、アラビア語内部での発展を考慮に入れるべきである。したがって、コプト語からの影響は、語彙的なものに限定されると結論づけている。同様にムンツェルも、古典アラビア語、エジプト・アラビア語カイロ方言、エジプト以外の地域のアラビア語諸方言を比較し、古典アラビア語や他の諸方言のなかにも稀ではあるがカイロ方言の場合と同じ疑問詞の語順の用例が観察されることを論拠として、コプト語影響説を否定した (Munzel 1950)。先にあげたビシャーイーはムンツェルと同じように、エジプト・アラビア語、各地域方言、古典アラビア語の三者を比較し、まったく正反対の結論を出している (Bishai 1960)。

古典アラビア語（あるいは古代アラビア語）には存在しない、諸方言の特徴を説明するために、当該先住民言語との単純な類似に基づきながら影響関係を議論している場合もある（Diem 1979）。このような傾向は、エジプトにおけるアラビア語とコプト語との言語接触だけでなく、被征服地域の先住民言語がアラビア語に与えた影響に関する議論全般にあてはまる。エジプト・アラビア語の疑問詞の語順に関する従来の議論にも同様の欠陥がある。このような議論では、疑問詞が文の頭位にあるか末位にあるかという点から実例を挙げるにとどまり、各言語（あるいは方言）における基本語順と語順移動に関する統語規則全体との関連から相互の異同を議論するには至っていない。また言語接触という通時の変化を問題にしながらも、通時的データをまったくと言っていいほど利用していない¹²⁾。さらに、エジプト方言（正確にはカイロ方言）と各地域方言を比較する際に注意すべき点としては、中世以降、特に近代以降は、通商などによる人口移動により、エジプトでの使用言語がペルシア湾岸地域、北アフリカ湾岸地域、紅海湾岸地域、オマーンなどの方言にも広がっている可能性がある。

コプト語の文法構造については、動詞組織に関するポロツキーの一連の革新的研究により、ビシャーイーをはじめとするコプト語影響説肯定論者たちが依拠してきたコプト語の語順に関する知見はまったく時代遅れのものとなっている。また、エジプト・アラビア語をはじめとするアラビア語諸方言についても、ベーンシュテットとヴォイディッヒによる浩瀚なエジプト方言言語地図の作成に見られるように、以前よりも豊富な言語データの活用が可能になった。

以下においては、エジプト・アラビア語、古典アラビア語、コプト語の各言語の語順に関する一般的な統語規則との関連を確認しながら、各言語の Wh 疑問文の語順を共時的に分析し、しかる後にエジプト・アラビア語の Wh 疑問文の語順変化について通時的なデータをもとに分析する。

4 エジプト・アラビア語とコプト語の疑問詞形の比較

エジプト・アラビア語（基本的にカイロ方言形で代表させ、以下では Eg.Ar と略記）、古典アラビア語（以下では Cl.A と略記）、コプト語（基本的には Sahidic 形で代表し、以下では Coptic あるいは必要に応じて Cop.Sah のように略記）で使われる基本的な疑問詞形（いわゆる英語の 5W1H）を以下に示す。

エジプト・アラビア語／古典アラビア語／コプト語の疑問詞形

	Eg.Ar	Cl.A	Coptic
誰 (who, whom) :	mīn	man	nim
何 (what) :	'ē(h)	mā, māḏā	ou, aš
なぜ (why) :	lē(h)	limāḏā (~lima)	etbe ou
どこ (where) :	fēn	'ayna	tōn
いつ (when) :	imta	matā	t(ñ)nau
どのように (how) :	izzay (~kēf)	kayfa	ñ aš ñ he

エジプト・アラビア語（カイロ方言形）の各疑問詞形の語源については諸説があるが、対応する他地域の方言形、エジプト方言地図における分布、エジプト方言の通時的なデータなどの比較分析から、おおよそ次のことが言えるだろう。

「誰 (who, whom)」を意味する /mīn/ については、古典アラビア語の /man/ の変形形と考えるのが一般的だが、man > mīn の変化における母音変化は他の単語には確認されない音声変化であることや、この /mīn/ がアラビア語諸方言に広く見られることなどから、/mīn/ という語形そのものか、*mī+n (*mī=who cf. Hebrew /mī/; *n=deictic element cf. /'anta/(you m.sg.) < *'a+n+ta) という語形変化を、古典アラビア語とは異なる形式としてアラビア語方言祖語に再構できるかもしれない。

「何 (what)」を意味する /'ē(h)/ については、古典アラビア語にも在証される /'ayyu/=「どの」と /šay'/=「物」による複合的疑問詞形である /'ayyu šayy-in/ から変化した語形と考えるのが妥当である。他の方言形や通時的データをもとに、'ayyu šayy-in > *'ayš > 'ēš > 'ē(h) という通時的变化が想定できる。

「なぜ (why)」を意味する /lē(h)/ については、古典アラビア語の /limāḏā/ (< li+māḏā, cf. li=for; māḏā=what) と同じ語形成によるもので、*li+'ayš (または li+'ēš) > lēš > lē(h) という通時的变化が想定できる。

「どこ (where)」を意味する /fēn/ については、古典アラビア語にも在証される前置詞 /fī/ =「～の中に」と、本来の疑問詞 /'ayna/ から複合的に形成された疑問詞形とするのが一般的である。つまり、*fī+'ayna (または *fi+'ayna) > fēn という通時的变化である。古典アラビア語においても、たとえば /min 'ayna/=「どこから」(cf. min=from) のように、疑問詞の /'ayna/ は前置詞と組み合わせられて複合的疑問詞を形成することが可能であったが、前置詞の /fī/ との複合形は生起例がない。アラビア語方言祖語に再構される他の疑問詞形との類推から、*fi+'ayy-in (cf. 'ayy-in='ayy-un の

属格形)を祖形とする説もあるが、アラビア語諸方言の比較から仮定される祖語の段階では、名詞の格変化語尾はすでに消失していたと考えるのが妥当である。仮にアラビア半島の現代ベドウィン方言に見られるような形骸化した格変化語尾を想定するとしても、/ʔē(h)/や/le(h)/などの他の疑問詞の通時的語形変化に相当する格変化語尾の残存形が見られないことを考え合わせると、*fi+ʔayy-in > *fē(h), あるいは *fi+ʔayyi+šay > *fi+ʔayš (または *fi+ʔēš) > *fēš ~ *fē(h) という通時的変化しか想定できない。また、主にベドウィン方言などによく見られる疑問詞 /wēn/ は、/ʔayna/ の語頭の声門閉鎖音が唇音化したものであるが、/fēn/ はさらに /wēn/ の語頭の唇音が摩擦音化したとも考えられる。

「いつ (when)」を意味する /imta/ については、自由交替形の /emta/ の存在や他の方言形との比較から、*ayyu+matā > *ʔaymata > *ʔēmta > emta ~ imta という通時的語形変化を想定できる。

「どのように (how)」を意味する /kēf/ は、明らかに古典アラビア語の /kayfa/ の変化形であるが、/izzay/ の方は上述の /imta/ と同様に、*ʔayš+ziyy ~ ʔayš+zay(y) (cf. Cl.A ziiy=fashion, shape; Eg.Ar zay(y)=like, similar to) > *ʔēšzay > izzay という通時的語形変化を想定できる。「何」を意味する現代エジプト方言の疑問詞 /ʔē/ の古形である /ʔēs/ が、古典アラビア語の名詞 /ziyy/, あるいはその方言的發展形と考えられるエジプト方言の前置詞 /zay(y)/ のどちらにせよ、接頭化されて現代方言形の /izzay/ を形成したという説明は、比較的古い表現ではあるが同様の通時的語形変化が、ešmeʔna (「どういう意味ですか?」 < *ʔēš+maʔnā cf. maʔnā=meaning) という慣用句に見出されることから蓋然性が高いと言える。

現代のエジプト・アラビア語に見られる各疑問詞形の語源と通時的語形変化に関する上記の説明は、あくまで各疑問詞の内部語構成に着目して他の方言形や通時的データをもとに再構したものである。これは、過去の特定の時期におけるエジプト・アラビア語の共時的体系として各疑問詞形の再構形の存在を仮定したものではなく、そのような体系が在証されているわけでもない。ただ、ここでの各疑問詞形への個別的分析を総合すると、次の三つのことが言えるだろう。① /mīn/ の分析で明らかになったように、現代方言形はかならずしも古典アラビア語形から変化したものではなく、現代諸方言の比較方言学的考察からは古典アラビア語とは異なるアラビア語方言祖語として再構することが可能である¹³⁾。② /mīn/ 以外の疑問詞形においては (/fēn/ についても疑問が残るものの)、/ʔē(h)/, またはその古形 (?) である /ʔēs/ が語形成の基本要素となっている。③ /ʔē(h)/ または /ʔēs/ による複合的疑問詞の語形成において、こ

これらの基本要素が接尾化する場合 (/lē(h)/ と /fēn/) と、接頭化する場合 (/imta/ と /izzay/) がある。後者の場合はさらに、/ē(h)/ と /ēs/ のどちらが接頭化するかで異なってくる。以上の①～③の三つの事実は、/ē(h)/ または /ēs/ から疑問詞を語形成するような共時的体系をもつエジプト・アラビア語の通時的段階を理論的に想定できるかもしれないこと、各疑問詞形の内部構造に見られる形態論的パターンが /ē(h)/ と /ēs/ という変異形の分布と関係しており、さらには両者が共時的には統語的生起制限と関係しているかもしれないことを示唆している。

次にコプト語の疑問詞形について、エジプト・アラビア語の疑問詞形の語形成とのあいだに類似点があるかどうか（つまり何らかの影響関係が想定できるかどうか）という観点から考察する。

まず「誰 (who, whom)」を意味する /nim/ は、エジプト・アラビア語の /mīn/ と語源的に関連付ける説もあるが、先ほど議論したように語源的には無関係とするのが妥当であろう。ただ、コプト語を含めた古代エジプト語においては、/m/ という形態素から疑問詞形の語形成が行なわれ (e.g. ḥr-m “why”, mj-m “how”), セム諸語の疑問詞形のなかに生起する同様の /m/ (e.g. Arabic mā “what”, man “who”) と関係があるとなれば、アフロ・アジア祖語というレベルではコプト語の /nim/ とエジプト・アラビア語の /mīn/ が語源的に共通する祖形までさかのぼれるかもしれない (Loprieno 1995: 70)。コプト語の /nim/ についても、語源的には古代エジプト語において焦点化を示す辞詞の /jn/ が /m/ に付加された複合形であった (jn-m > nim, e.g. (j)n-m jnj tʷ “who brought you?”)。

次に「何」を意味する /ou/ と /aš/ については、後者の /aš/ とエジプト・アラビア語の /ēs/ との類似が問題となる。/ēs/ の語源については先に議論したように、/šay/ から変化した複合形であり、一方の /aš/ は同じ意味を持つ古代エジプト語の /jḥ/ の変化形である¹⁴⁾。

その他のコプト語の疑問詞形については少なくとも表面的な類似は見られないが、語形成の内部構造のパターンを見るかぎりにおいて、「なぜ」を意味するコプト語の /etbe ou/ (文字通りには for+what; cf. etbe=for) とエジプト・アラビア語の /lē/, さらに「どのように」を意味するコプト語の /n̄ aš n̄ he/ (文字通りには in+what+of+manner) とエジプト・アラビア語の /izzay/ が似ていることを指摘しておく。

5 エジプト・アラビア語の Wh 疑問文

5.1 エジプト・アラビア語の基本語順

主語 (S)・動詞 (V)・目的語 (O) の基本語順に関して言えば、エジプト・アラビア語 (カイロ方言) は SVO 語順である [例文 (1)]。それに対して、古典アラビア語は VSO 語順である [例文 (2)]。

(1) aḥmad ḡarab zēnab fi-l-madrasa imbāriḥ [S+V+O]

Ahmad-S struck-Pf-3-m-sg Zēnab-O in-the-school yesterday

「昨日アフマドがゼーナブを学校でなぐった」

(2) ḡaraba ’aḥmad-u zaynab-a fi-l-madrasat-i ’amsi [V+S+O]

struck-Pf-3-m-sg Ahmad-nom-S Zaynab-acc-O in-the-school-gen yesterday

「昨日アフマドがザイナブを学校でなぐった」

古典アラビア語では主語や目的語を主格・対格といった語尾の格変化で標示しており、語順の自由度が比較的高かった。エジプト・アラビア語ではこのような格変化が消失し、エジプト方言をふくめて現代アラビア語諸方言は、基本語順の類型論的観点から見て VSO 言語から SVO 言語へと変化している段階にある。

エジプト・アラビア語では、話題化 (topicalization) された語は文頭に移動し、目的語が話題化された場合には、移動する前に占めていた元の統語的位置に再叙的な接尾代名詞 (resumptive pronoun) が現れる [例文 (3)]¹⁵⁾。古典アラビア語の場合にもほとんど同じ文法規則がはたらくが、文頭に移動した語は主格となる [例文 (4)]。

(3) zēnab, aḥmad ḡarab-ha fi-l-madrasa imbāriḥ [T(=O)+S+Vp]

Zēnab-T(=O) Ahmad-S struck-pro

「ゼーナブは、昨日アフマドが学校でなぐった」

(4) zaynab-u, ḡaraba-hā ’aḥmad-u fi-l-madrasat-i ’amsi [T(=O:nom)+Vp+S]

Zaynab-nom-T(=O) struck-pro Ahmad-nom-S

「ザイナブは、昨日アフマドが学校でなぐった」

主語が話題化された場合は、エジプト・アラビア語では通常の文と同じ語順だが [例文 (5)]、古典アラビア語では文頭に移動する [例文 (6)]。どちらの場合も再叙的な代名詞化は起こらない¹⁶⁾。

- (5) aḥmad, ḡarab zēnab fi-l-madrasa imbāriḥ [T(=S)+V+O]
 Ahmad-T(=S) struck Zēnab-O
 「アフマドは、昨日ゼーナブを学校でなぐった」
- (6) 'aḥmad-u, ḡaraba zaynab-a fi-l-madrasat-i 'amsi [T(=S:nom)+V+S]
 Ahmad-nom-T(=S) struck Zaynab-acc-O
 「アフマドは、昨日ザイナブを学校でなぐった」
- 英語の強調構文にあたる分裂文 (cleft sentence) については、エジプト・アラビア語の場合は、英語の「It~that」と構造的に類似した「da~illi」という構文をとる〔例文(7)と(8)〕。「da~illi」構文の da は本来「これ(は)」を意味する指示代名詞であり、illi は関係詞である。古典アラビア語の場合は、焦点化された語が文頭に移動するだけであり、前述の話題化の場合とは異なって、移動する語の格形式は変化せず、再叙的な接尾代名詞も現れない〔例文(9)と(10)]¹⁷⁾。
- (7) da aḥmad illi ḡarab zēnab fi-l-madrasa imbāriḥ [da+F(=S)+rel+V+O]
 this Ahmad-F(=S) rel struck Zēnab-O
 「昨日ゼーナブを学校でなぐったのは、アフマドだ」
- (8) da(~di) zēnab illi aḥmad ḡarab-ha fi-l-madrasa imbāriḥ [da+F(=O)+rel+S+Vp]
 this Zēnab-F(=O) rel Ahmad-S struck-pro
 「昨日アフマドが学校でなぐったのは、ゼーナブだ」
- (9) 'aḥmad-u, ḡaraba zaynab-a fi-l-madrasat-i 'amsi [F(=S:nom)+V+O]
 Ahmad-nom-F(=S) struck Zaynab-acc-O
 「昨日ザイナブを学校でなぐったのは、アフマドだ」
- (10) zaynab-a, ḡaraba 'aḥmad fi-l-madrasat-i 'amsi [F(=O:acc)+V+S]
 Zaynab-acc-F(=O) struck Ahmad-nom-S
 「昨日アフマドが学校でなぐったのは、ザイナブだ」

以上の話題化と焦点化にともなう語順変化の議論から、古典アラビア語は基本語順が VSO であり、文頭の動詞の前の位置には、話題語 (T) か焦点語 (F) のどちらにせよ、統語構造上は移動できるスロットが一つしかない。一方、エジプト・アラビア語の場合は、基本語順が SVO であり、文頭にある (一つの) スロットは話題化による移動先のみあてられており、焦点化のために「da~illi」という構文が新たに発達したと考えられる¹⁸⁾。

5.2 エジプト・アラビア語の Wh 疑問文の語順

5.2.1 Wh-in-situ 疑問文

次のエジプト・アラビア語の例文 (11) は、前出の例文 (1) の主語に関して尋ねる疑問文であり、語順に関しては主語が疑問詞にそのまま置き換わるため、形式的には文法規則として文頭への移動があったかどうかを判断することができない。一方、それに対応する古典アラビア語の疑問文の例文 (12) では、前出の例文 (2) の主語が疑問詞に置き換わり、文頭へ移動している。

(11) *mīn qarab zēnab fi-l-madrasa imbāriḥ* [Wh(=S)+V+O]
 who(=S) struck Zēnab-O

「誰が、昨日ゼーナブを学校でなぐったか？」

(12) *man qaraba zaynab-a fi-l-madrasat-i 'amsi* [Wh(=S)+V+O]
 who-S struck Zaynab-acc-O

「誰が、昨日ザイナブを学校でなぐったか？」

次の例文 (13) と (14) は前出の例文 (1) と (2) の目的語にあたる部分が疑問詞になったものである。エジプト・アラビア語の場合は疑問詞の移動はなく、古典アラビア語の場合は文頭へ移動している。

(13) *aḥmad qarab mīn fi-l-madrasa imbāriḥ* [S+V+Wh(=O)]
 Ahmad-S struck whom-O

「アフマドが昨日、誰を学校でなぐったか？」

(14) *man qaraba 'aḥmad-u fi-l-madrasat-i 'amsi* [Wh(=O)+V+S]
 whom-O struck Ahmad-nom-S

「誰を、アフマドが昨日学校でなぐったか？」

エジプト・アラビア語の場合、疑問詞の /mīn/ を先頭へ移動させた文は文法的に認められず、非文となる。

(15)* *mīn aḥmad qarab fi-l-madrasa imbāriḥ*
 whom-O Ahmad-S struck

これに対して、例文 (11) に関しては目的語の /zēnab/ を話題化して文頭に移動させることができる¹⁹⁾。

(16) *zēnab, mīn qarab-ha fi-l-madrasa imbāriḥ* [T(=O)+Wh(=S)+Vp]
 Zēnab-T(=O) who(=S) struck-pro

「何」を意味する疑問詞 /ē(h)/ についても /mīn/ と同様のことが言える。以下の例文

では、エジプト・アラビア語〔例文(18)〕と古典アラビア語〔例文(19)〕の目的語が疑問文になる場合をあげておく。

(17) aḥmad 'ara ik-kitāb da [S+V+O]

Ahmad-S read-Pf-3-m-sg the-book-O this

「アフマドがこの本を読んだ」

(18) aḥmad 'ara 'ē(h) [S+V+Wh(=O)]

Ahmad-S read what-O

「アフマドが何を読んだか？」

(19) māḏā qara'a 'aḥmad-u [Wh(=O)+V+S]

what-O read Ahmad-S

次の例文は「どこ」を意味する疑問詞の場合であるが、エジプト・アラビア語では疑問詞は移動せず〔例文(20)〕、古典アラビア語では文頭に移動する〔例文(21)〕。またこの場合もエジプト・アラビア語では目的語を話題化した文が可能である〔例文(22)〕。

(20) aḥmad ḡarab zēnab imbāriḥ fēn (~fēn imbāriḥ) [S+V+O+Wh(=Ad)]

Ahmad-S struck Zēnab-O where

「アフマドが昨日ゼーナブを、どこでなぐったか？」

(21) 'ayna ḡaraba 'aḥmad-u zaynab-a 'amsi [Wh(=Ad)+V+S+O]

where struck Ahmad-nom-S Zaynab-acc-O

「どこで、アフマドが昨日ザイナブをなぐったか？」

(22) (huwwa) zēnab, aḥmad ḡarab-ha imbāriḥ fēn [T(=O)+S+Vp+Wh(=Ad)]

Zēnab-T(=O) Ahmad-S struck-pro where

同様のことは、その他の副詞的な疑問詞の場合でも言える。以下、「いつ」を意味する /imta/, 「なぜ」を意味する /lē(h)/, 「どのように」を意味する /izzay/ の順に、それぞれの疑問詞についてエジプト・アラビア語、古典アラビア語の例文、およびエジプト・アラビア語で目的語が話題化された例文をあげる。

「いつ」を意味する /imta/ :

(23) aḥmad ḡarab zēnab fi-l-madrasa imta [S+V+O+Wh(=Ad)]

Ahmad-S struck Zēnab-O when

「アフマドが、いつゼーナブを学校でなぐったか？」

(24) matā ḡaraba 'aḥmad-u zaynab-a fi-l-madrasat-i [Wh(=Ad)+V+S+O]

when struck Ahmad-nom-S Zaynab-acc-O

「いつ、アフマドがザイナブを学校でなぐったか？」

- (25) (huwwa) zēnab, aḥmad ḡarab-ha fi-l-madrasa imta [T(=O)+S+Vp+Wh(=Ad)]
 Zēnab-T(=O) Ahmad-S struck-pro when

「なぜ」を意味する /lē(h)/ :

- (26) aḥmad ḡarab zēnab lē(h) [S+V+O+Wh(=Ad)]
 Ahmad-S struck Zēnab-O why

「アフマドが、なぜゼーナブをなぐったか？」

- (27) limāḡā ḡaraba 'aḥmad-u zaynab-a [Wh(=Ad)+V+S+O]
 why struck Ahmad-nom-S Zaynab-acc-O

「なぜ、アフマドがザイナブをなぐったか？」

- (28) (huwwa) zēnab, aḥmad ḡarab-ha lē(h) [T(=O)+S+Vp+Wh(=Ad)]
 Zēnab-T(=O) Ahmad-S struck-pro why

「どのように」を意味する /izzay/ :

- (29) aḥmad ḡarab zēnab izzay [S+V+O+Wh(=Ad)]
 Ahmad-S struck Zēnab-O how

「アフマドが、どのようにゼーナブをなぐったか？」

- (30) kayfa ḡaraba 'aḥmad-u zaynab-a [Wh(=Ad)+V+S+O]
 how struck Ahmad-nom-S Zaynab-acc-O

「どのように、アフマドがザイナブをなぐったか？」

- (31) (huwwa) zēnab, aḥmad ḡarab-ha izzay [T(=O)+S+Vp+Wh(=Ad)]
 Zēnab-T(=O) Ahmad-S struck-pro how

付け加えておくと、副詞的な要素が疑問詞となった場合、エジプト・アラビア語では次の例文のように主語が動詞の後ろに移動する場合もある。これは、文語的な現代標準アラビア語との二重言語変種併用 (diglossia) による文法的干渉作用によるものと考えられる。

- (32) (huwwa) zēnab, ḡarab-ha aḥmad {fēn / imta / lē(h) / izzay} [T(=O)+Vp+S+Wh(=Ad)]

5.2.2 Wh-in-comp 疑問文

エジプト・アラビア語 (カイロ方言) には、これまでに議論したような疑問詞の移動が見られない、いわゆる Wh-in-situ 疑問文のほかに、疑問詞が文頭に移動する Wh-in-comp 疑問文もある。次の例文は前出の例文 (11) と (13) に対応する疑問文である。それぞれ主語あるいは目的語にあたる部分が疑問詞として文頭へ移動している。

(33) mīn illi ɕarab zēnab fi-l-madrasa imbāriḥ [Wh(=S)+rel+V+O]

who(=S) rel struck Zēnab-O

「昨日ゼーナブを学校でなぐったのは、誰か？」

(34) mīn illi aḥmad ɕarab-uh fi-l-madrasa imbāriḥ [Wh(=O)+rel+S+Vp]

who(-O) rel Ahmad-S struck-pro

「昨日アフマドが学校でなぐったのは、誰か？」

ここで使われている /illi/ は、本来は関係詞であり、焦点化による移動であった「da~illi」分裂文に使われる /illi/ と同じ機能をはたしていると考えられる。「da~illi」分裂文の場合と同様に、例文 (34) においても移動した /mīn/ があった元の位置に再叙的な接尾代名詞が現れる²⁰⁾。このように考えると、これらの例文にみられるような文頭へ移動した疑問詞についても、文法的には焦点化による移動としてあつかうことが可能だろう。ここで問題となるのは、例文 (11) や (13) のような通常の（あるいは無標の）Wh-in-situ 疑問文と、例文 (33) や (34) のような焦点化された（有標の）Wh-in-comp 疑問文がもつ意味上の相違点である。例文 (13) と (34) を比べた場合、後者の疑問文では、話し手はアフマドが昨日学校で誰かをなぐったことをすでに知っており、聞き手の方も当該の事象に関して話し手と同じ情報（あるいは当該の事象に関して話し手が欠いている情報も含めたより完全な情報）をすでに所有している（と話し手が判断する）会話状況において、質問者である話し手は、文において焦点化された部分に関する情報（例文 (34) においては話し手に欠けている疑問詞 /mīn/ に相当する情報）のみを尋ねているのである。これを談話機能の観点から言い換えれば、文の中で /illi/ より後ろに来る部分が含む情報は既知の旧情報であり、話し手と聞き手の双方が実際に起こったこととして情報を共有している内容である。

「何」を意味する疑問詞の /'ē(h)/ の場合も、文頭へ疑問詞が移動する Wh-in-comp 疑問文が可能である。次の例文 (35) は、前出の例文 (18) の /'ē(h)/ が焦点化されて文頭へ移動した Wh-in-comp 疑問文であり、移動する前の元の位置には再叙的な接尾代名詞が現れる。

(35) 'ē(h) illi aḥmad 'arā-h [Wh(=O)+rel+S+Vp]

what(=O) rel Ahmad-S read-pro

「アフマドが読んだのは、何か？」

また、主語が疑問詞として文頭へ移動した文も可能である。

(36) 'ē(h) illi b-yiḥṣal hena [Wh(=S)+rel+V]

what(=S) rel happening here

「いったい何がここで起きているのだ? (ここで起きているのは, 何か?)」
 話題化については, 基本的に /illi/ を使った疑問文では不可能であると思われる²¹⁾。

(37)* (huwwa) zēnab, mīn illi ɖarab-ha fi-l-madrasa imbāriḥ
 Zēnab-T(=O) who(-O) rel struck-pro

(38)* (huwwa) aḥmad, mīn illi (huwwa) ɖarab-uh fi-l-madrasa imbāriḥ
 Ahmad-T(=S) who(-S) rel struck-pro

(39)* (huwwa) aḥmad, 'ē(h) illi (huwwa) 'arā-h
 Ahmad-T(=S) what(=O) rel read-pro

文中の主語や目的語が疑問詞となる /mīn/ や /'ē(h)/ の場合とは異なり, 文中の副詞的な部分が疑問詞となる場合は, 文頭への移動ができるかどうかに関して各疑問詞間に若干の異同が見られる²²⁾。

まず場所を表す疑問詞の /fēn/ の場合, Wh-in-situ 疑問文である前出の例文 (20) に対して疑問詞を文頭に移動させた例文 (40) は, 完全な非文とはならないが, 大部分のインフォーマントにとって若干許容度が低いようである²³⁾。ただし, カイロ方言において比較的革新的な方言を使う若年層に属するインフォーマントの場合には, 例文 (41) のように文末でもう一度疑問詞 /fēn/ を繰り返した文は完全に許容される。

(40)?? fēn aḥmad ɖarab zēnab imbāriḥ [Wh(=Ad)+S+V+O]
 where Ahmad-S struck Zēnab-O

「アフマドが昨日ゼーナブをなぐったのは, どこか?」

(41) fēn aḥmad ɖarab zēnab imbāriḥ fēn
 where Ahmad-S struck Zēnab-O where

また疑問詞の /mīn/ や /'ē(h)/ の場合とは異なり, /illi/ を使った文は完全に非文となる。ただ本来 /illi/ が関係詞であり, 先行詞として名詞 (句) しか取れないことからすれば, 例文 (42) のような文が文法的でないのは当然のことと見なすことができる。

(42)* fēn illi aḥmad ɖarab zēnab imbāriḥ
 where rel Ahmad-S struck Zēnab-O

前出の例文 (22) にみられる通り, /fēn/ を使った Wh-in-situ 疑問文においては目的語等を話題化して文頭に移動させることが可能だったが, /fēn/ が文頭にきた Wh-in-comp 疑問文である例文 (40) を, さらに話題化させた文は完全に非文となる。

(43)* (huwwa) zēnab, fēn aḥmad ɖarab-ha imbāriḥ
 Zēnab-T(=O) where Ahmad-S struck-pro

また, 例文 (22) の疑問詞 /fēn/ を文頭へ移動させることはできない。

(44) * fēn zēnab, aḥmad ɖarab-ha imbāriḥ
 where Zēnab-T(=O) Ahmad-S struck-pro

ただし、主語にあたる部分を話題化して文頭に移動させ、次の位置に疑問詞の /fēn/ がくるような文については、許容度がかなり高くなる²⁴⁾。

(45) ??? (huwwa) aḥmad, fēn ɖarab zēnab imbāriḥ
 Ahmad-T(=S) where struck-pro Zēnab-O

/fēn/ に比べると、それ以外の副詞的な疑問詞の場合は、文頭に移動した Wh-in-comp 疑問文が文法的であるとみなされる傾向が強い。/imta/ の場合、前出の例文 (23) のなかの疑問詞を文頭へ移動した例文 (46) は完全に文法的である。/fēn/ の場合と同様、/illi/ を使う文は不可能であるが [例文 (47)], 前出の例文 (43) に対応する、目的語を話題化して文頭に移動させた文は許容度が高くなり [例文 (48)], 前出の例文 (45) に対応する、主語を話題化してその後ろの位置に疑問詞を入れた文は完全に文法的と判断される [例文 (49)]。

(46) imta aḥmad ɖarab zēnab fi-l-madrasa [Wh(=Ad)+S+V+O]
 when Ahmad-S struck Zēnab-O

「アフマドがゼーナブを学校でなくったのは、いつか？」

(47) * imta illi aḥmad ɖarab zēnab fi-l-madrasa
 when rel Ahmad-S struck Zēnab-O

(48) ?? (huwwa) zēnab, imta aḥmad ɖarab-ha fi-l-madrasa
 Zēnab-T(=O) when Ahmad-S struck-pro

(49) (huwwa) aḥmad, imta ɖarab zēnab fi-l-madrasa
 Ahmad-T(=S) when struck Zēnab-O

疑問詞の /lē(h)/ についても上記の /imta/ と基本的に同じことが言える。

(50) lē(h) aḥmad ɖarab zēnab fi-l-madrasa [Wh(=Ad)+S+V+O]
 why Ahmad-S struck Zēnab-O

「アフマドがゼーナブを学校でなくったのは、なぜか？」

(51) * lē(h) illi aḥmad ɖarab zēnab fi-l-madrasa
 why rel Ahmad-S struck Zēnab-O

(52) ?? (huwwa) zēnab, lē(h) aḥmad ɖarab-ha fi-l-madrasa
 Zēnab-T(=O) why Ahmad-S struck-pro

(53) (huwwa) aḥmad, lē(h) ɖarab zēnab fi-l-madrasa
 Ahmad-T(=S) why struck Zēnab-O

疑問詞の /izzay/ についても同様である。

(54) izzay aḥmad ḡarab zēnab fi-l-madrasa [Wh(=Ad)+S+V+O]

how Ahmad-S struck Zēnab-O

「アフマドがゼーナブを学校でなぐったのは、 どうやってか？」

(55)* izzay illi aḥmad ḡarab zēnab fi-l-madrasa

how rel Ahmad-S struck Zēnab-O

(56)?? (huwwa) zēnab, izzay aḥmad ḡarab-ha fi-l-madrasa

Zēnab-T(=O) how Ahmad-S struck-pro

(57)(huwwa) aḥmad, izzay ḡarab zēnab fi-l-madrasa

Ahmad-T(=S) how struck Zēnab-O

5.3 Wh 疑問文の生起制限と文法構造

文中の主語や目的語が疑問詞となる /mīn/ や /ʔē(h)/ を使った疑問文の場合は、疑問詞の移動がない Wh-in-situ 疑問文が無標の文法構造であり、 /illi/ を使って文頭に移動する Wh-in-comp 疑問文は、既知の旧情報としての内容を含む /illi/ より後ろの文に対して、疑問詞に相当する部分が焦点化された有標の文法構造をもっていると理解できる。また、前者の Wh-in-situ 疑問文の場合は、目的語等の文の一部を話題化（既知の旧情報）して、文頭に移動させることが可能だったが、後者の Wh-in-comp 疑問文の場合は同様の移動は不可能であった。焦点化や話題化における文の情報構造と当該部分の移動との関係を考慮すれば、後者の Wh-in-comp 疑問文の移動に関する生起制限は説明がつくものと言える。それでは、 /mīn/ や /ʔē(h)/ 以外の副詞的な疑問詞についても同様の文法構造を想定してもよいのであろうか。

時間や場所を表す副詞的要素は、エジプト・アラビア語においても生起する文中の位置に関して比較的自由度が高いのであるが、これまでに議論してきたように、 /mīn/ や /ʔē(h)/ を使った疑問文に比べると、 /fēn/, /imta/, /lē(h)/, /izzay/ を使った疑問文はさまざまな位置に生起する疑問詞に対して文法的許容度にゆれが観察された。さらにこれらの四つの疑問詞のあいだでも、 /fēn/ とその他の疑問詞では相違があった。これらの文法的許容度のゆれは、一つには古いタイプの保守的な方言の話者であるか、それとも若年層に多い革新的な方言の話者であるか、また文語的な表現にどれくらい文法的に干渉されているかといった社会言語学的パラメーターに起因するとも考えられる。しかしながら、これらのゆれを共時的な文法構造の記述という観点から捉えなおした場合、すくなくとも記述の経済性という点において、三つの文法記述が可能であ

ろう。

まず一つ目は、/mīn/ や /ē(h)/ も含めてすべての疑問詞について統一的な統語規則を想定する記述方法である。この場合、/fēn/, /imta/, /lē(h)/, /izzay/ についても文末に後置された疑問文を基本となる無標の文法構造とみなして、文頭へ移動する疑問文を焦点化による二次的な有標の文法構造と考えることになる。しかしながら、たとえば /imta/ を使った疑問文の場合、例文 (25) のように目的語が話題化されて文頭に移動した文については、/mīn/ や /ē(h)/ と同じ規則の適用で説明できるが、例文 (49) が可能である説明は、例文 (38) が不可能であることの説明と整合的に首尾一貫させることはできない。さらに例文 (40) 以下にあるような /fēn/ の特異性も説明できず、例外的な規則適用を想定するには、/fēn/ の生起例が多いことやその他の副詞的な疑問詞の生起制限との類似性を考慮するならば、かなりの無理がある。

次に二つ目の記述方法は、/mīn/ や /ē(h)/ を使った疑問文と、それ以外の /fēn/, /imta/, /lē(h)/, /izzay/ を使った疑問文とに別々の文法構造を想定する方法である。この場合、相当する場所や時間の副詞（句）、さらに理由や方法に関する副詞的表現（句や文）の統語的生起に準じて、これらの疑問詞には特段の無標の位置を想定しないという記述もありうるが、次例のように、これらの疑問詞は動詞と目的語とのあいだに生起することはできないというような厳然とした生起制限もある。

(58) * aḥmad qarab {fēn / imta / lē(h) / izzay} zēnab

Ahmad-S struck

Zēynab-O

それでは、/mīn/ や /ē(h)/ とは異なり、文頭と文末にくる場合のどちらを基本となる無標の文法構造とすることが可能だろうか。/mīn/ や /ē(h)/ を使った疑問文に関して議論したように、文中のどの部分が既知の旧情報を担っているかという点から見ると、/fēn/ と /imta/ をふくんだ疑問文については、文末に疑問詞がくる場合が /illi/ を使った /mīn/ や /ē(h)/ の Wh-in-comp 疑問文に意味の上では相当し、疑問詞より前の文の部分が既知の旧情報をふくんでおり、疑問詞の /fēn/ や /imta/ が質問事項として焦点化されていると言える。その意味で、/fēn/ と /imta/ を文末に置く疑問文は、/illi/ を使った疑問文と同じような分裂文的文法構造をもっているとみなせる。/lē(h)/ や /izzay/ については若干の問題が残るが、文末にくる /izzay/ が長母音と強勢をともなって /izzāy/ と発音されることなどを考えあわせると、同様のことが言えるだろう。このように考えれば、文頭に疑問詞がくる疑問文を基本の無標の文法構造として、たとえば例文 (49) は例文 (46) から主語が話題化して文頭に移動したものとみなせる。では、例文 (48) の許容度が低いのはどのように説明できるだろうか。次の例文は、

主語を動詞の後ろにもってきた文であり、例文(48)に比べるとより文法的に可能な文と判断される。

(59)??? (huwwa) zēnab, {fēn / imta / lē(h) / izzay} qarab-ha aḥmad
 Zēnab-T(=O) struck-pro Ahmad=S

このような文が文法的に容認される理由として、VSO語順を基本語順とする文語的な現代標準アラビア語が文法的に干渉しているという見方もできるが、これらを容認するのはそのほとんどが保守的な話者であるという事実から、より古いタイプの方言に見られる文法記述上想定可能なVSO語順と関連する統語規則のためであるともみなせる。この場合は、基本語順をVSOとして、動詞の前に移動できる話題化された語は古典アラビア語と同じように一つのみであり、目的語が移動した場合は、[T(=O)+Vp+S]という主語が後置される語順となる²⁵⁾。文末に疑問詞を想定した一つめの記述方法について考察したとき、例文(25)のような話題化文を統一的に説明できるというメリットをあげたが、実を言うと、例文(25)のような話題化文は比較的革新的な若年層の話者が積極的に容認する文であり、保守的な話者の場合は文法的に容認できないと判断することが多い。

以上のことを考えると、三つめの記述方法の選択肢として、保守的な方言の話者の文法と革新的な若年層の話者の方言の文法を二つの社会方言として別個に記述する方法がある。ただし、事実はそれほど単純ではない。このような社会方言を明確に区別できるわけではなく、実際には一人の話者がここで観察しているような文法現象を併用しているからである。またこれら二つの社会方言については、通時的な二つの相が重なり合っているという見方もできると思われるが、厳密な意味での共時的な文法構造の記述に通時的情報を混在させるのは記述方法論的にも困難であるし、個人の言語運用ならびに文法能力の存在形式としても理論的には容認できないであろう。残された記述方法としては、/mīn/ や /lē(h)/ の文法構造と、/fēn/ (さらには /imta/) の文法構造、そしてその他の /lē(h)/ や /izzay/ の文法構造を別個に記述していく方法がある。この方法は、基本語順にVSOとSVOの両方を想定しなければならず、原理上も整合的でないばかりでなく、規則適用の複雑さからみても経済的な記述であるとはみなせない。ここでの考察の目的は、エジプト・アラビア語のWh疑問文に関して理論的に整合的な記述をおこなうことよりはむしろ、言語事実の解明であるので、これ以上の議論はおこなわないが、エジプト・アラビア語のWh疑問文に関する共時的な文法構造は、Wh-in-situ疑問文が比較的新しく成立した文法規則であることを示唆する次のような要素があることを指摘しておく。

エジプト・アラビア語における Wh-in-situ 疑問文の通時的考察に対して重要な証拠となるのが、「島の制約 (island constraints)」とよばれる文法現象におけるエジプト・アラビア語の疑問文の扱いである。ワフバによる生成文法の枠組みによるエジプト・アラビア語の疑問文の研究によれば、たとえば次の例文 (60) と (61) にあるように、英語のような言語では等位関係にある目的語の一部を疑問詞化できないが、エジプト・アラビア語の場合、多くの話者はこれを完全に文法的であると判断するものの、保守的な古いタイプの方言の話者はこれとは反対に容認できないとする (Wahba 1984)。ただし、文法的であると判断する場合でも、等位関係にある後ろの要素の疑問詞化は可能であるが〔例文 (61)〕、前の要素の疑問詞化は不可能であるとする〔例文 (62)〕。また、同要素を文頭に移動させることは不可能である〔例文 (63)〕。

(60) muḥammad ḡarab ḡasan wi-aḡmad
 Muhammad-S struck Hasan-O and-Ahmad-O
 「ムハンマドはハサンとアフマドをなぐった」

(61) muḥammad ḡarab ḡasan wi-mīn
 Muhammad-S struck Hasan-O and-whom-O
 「ムハンマドはハサンと誰をなぐったか？」

(62)* muḥammad ḡarab mīn wi-aḡmad
 Muhammad-S struck whom-O and-Ahmad-O
 「ムハンマドは (いっしょに) 誰とアフマドをなぐったか？」

(63)* mīn illi muḥammad ḡarab ḡasan wi-(huwwa)
 whom-O rel Muhammad-S struck Hasan-O and-pro
 「ムハンマドがハサンと (いっしょに) なぐったのは、だれか？」

同様に次の例文のように、/illi/ に後続する関係節のなかの主語について、多くの話者はこれを完全に文法的であると判断するが、保守的な古いタイプの方言の話者は容認できないとする。

(64) muḥammad šāf ir-rāḡil illi ḡasan ḡarab-uh imbāriḡ
 Muhammad-S saw the-man rel Hasan-S struck-pro yesterday
 「ムハンマドは、ハサンが昨日なぐった男を見た」

(65) muḥammad šāf ir-rāḡil illi mīn ḡarab-uh imbāriḡ
 Muhammad-S saw the-man rel who-S struck-pro yesterday
 「ムハンマドは、誰が昨日なぐった男を見たか？」

- (66)* mīn illi muḥammad šāf ir-rāgil illi (huwwa) ɖarab-uh imbāriḥ
 who-S rel Muhammad-S saw the-man rel (pro-S) struck-pro yesterday
 「ムハンマドが昨日なぐった男を見たのは、誰か？」

6 コプト語の Wh 疑問文

6.1 コプト語の基本語順

コプト語の基本語順は SVO 語順である。コプト語の通常の文は、converter とよばれる接頭辞が名詞または代名詞につくことで形成される。以下の自動詞を含む例文の内、(67-a) では、動詞語幹 /bök/ に前接する /af-/ の /a/ が「完了第 1 形 (First Perfect)」とよばれる converter であり、/f/ が「彼」を指示する代名詞である。この前接辞の converter と動詞活用形の組み合わせは、動詞のテンスやアスペクトだけでなく、関係構文や強調構文などの統語環境全体とも関連している。(67-b) では、主語となる名詞の前に converter の /a/ がきている。(67-c) は主語の名詞が話題化された文であり、(67-d) は主語の名詞が焦点化もしくは、再確認のために右方転移した文である。

- (67-a) af-bök [pV]

converter-he-went

「彼が行った」

- (67-b) a-p-rōme bök [S+pV]

converter-the-man-S went

「その男が行った」

- (67-c) p-rōme af-bök [T(=S)+V]

the-man-S he-went

「その男は行った」

- (67-d) af-bök nči p-rōme [pV+F(=S)]

converter-he-went (nči) the-man-F(=S)

「行ったのは、その男だ〔彼が行った、(彼とはつまり) その男だが〕」

また次の例文にあるように、主語だけでなく目的語も話題化によって文頭へ移動する。この場合、話題化された目的語は元の位置に再叙的な接尾代名詞が現れ、話題化の標識としてギリシア語起源の辞詞 /de/ が選択的に使われる。

(68-a) a-p-rōme kōt m̄ p-ēi [S+V+O]

converter-the-man-S built (O-marker) the-house

「その男がその家を建てた」

(68-b) p-rōme af-kōt m̄ p-ēi [T(=S)+V+O]

the-man-T(=S) converter-he-built the-house

「その男は、その家を建てた」

(68-c) p-ēi (de) a-p-rōme kōt m̄mo-f [T(=O)+S+V+p]

the-house-T(=O) converter-the-man built it(=the house)

「その家は、その男が建てた」

コプト語の強調表現には、焦点化される要素が主語または目的語の場合と、時間や場所などの副詞的要素の場合とで二通りある。前者の場合、前出の例文(68-a)の主語を焦点化した次の例文(69-a)にあるように、焦点化された名詞(句)は文頭へ移動し、冠詞(あるいは連辞)と第2形の converter を伴う関係詞の複合形を使った分裂文となる。目的語が焦点化される場合も例文(69-b)のように同様である。また焦点化された名詞は、主語あるいは目的語ともに元の位置に再叙的な接尾代名詞が現れる。

(69-a) p-rōme penta-f-kōt m̄ p-ēi [F(=S)+penta(2nd rel)+pV+O]

the-man-F(=S) penta(=2nd rel)-he-built the-house-O

「その家を建てたのは、その男だ」

(69-b) p-ēi penta-p-rōme kōt m̄mo-f [F(=O)+penta(2nd rel)+S+Vp]

the-house-F(=O) penta-the-man-S built it(=the house)

「その男が建てたのは、その家だ」

副詞的要素が焦点化される場合は、関連する要素は文中で移動することなく、接頭化されている converter を第2形に変えることで表現される。次の例文では、理由を表す副詞句の部分焦点化するために、converter が完了第1形の /a/ から完了第2形の /n̄ta/ に変わっている。

(70-a) a-pai šōpe etbēēt-k̄

converter(1st Perfect)-this-S happened because of-you

「これはあなたのために起った」

(70-b) n̄ta-pai šōpe etbēēt-k̄

converter(2nd Perfect)-this-S happened because of-you

「これが起ったのは、あなたのためだ」

6.2 コプト語の Wh 疑問文の語順

コプト語の疑問詞の語順は一見すると複雑に見えるが、強調構文の場合と同様に主語や目的語が疑問詞となる場合と、それ以外の副詞的要素が疑問詞となる場合で大きく扱いが異なる。前者の場合、それぞれ主語と目的語が疑問詞となった次の例文 (71-a) と (72-a) からわかるように、第 2 形の converter を伴う関係詞による分裂文と同じ強調構文が使われる。ここでは当該の疑問詞化された要素が文頭に移動し、元の位置には再叙的な接尾代名詞が現れる。ただし、主語や目的語の Wh 疑問文の場合も、例文の (71-b) と (72-b) にあるように、文頭の第 1 形の converter を第 2 形に変えることで疑問文を作ることが可能であるが、このような移動を伴わない Wh-in-situ 疑問文はきわめてまれである。

(71-a) nim penta-f-kōt m̄ p-ēi [Wh(=S)+penta(2nd rel)+pV+O]
 who(=S) pental-he-built the-house-O
 「誰がその家を建てたか? (その家を建てたのは、誰だ?)」

(71-b) n̄ta-nim kōt m̄ p-ēi
 converter(2nd Perfect)-who-S built the-house-O
 「誰がその家を建てたか?」

(72-a) ou penta-p-rōme kōt m̄mo-f [Wh(=O)+penta(2nd rel)+S+V+p]
 what(=O) penta-the-man-S built it(=what)
 「その男が何を建てたか? (その男が建てたのは、何だ?)」

(72-b) n̄ta-p-rōme kōt ou
 converter(2nd Perfect)-the-man-S built what(=O)
 「その男が何を建てたか?」

副詞的要素が疑問詞となる場合は、主語や目的語が疑問詞となる場合とは異なり、第 2 形の converter を使った構文が一般的である。この場合は、副詞的要素が焦点化される通常の平叙文の強調構文の場合と同様に疑問詞の位置は移動しない。次の例文 (73) と (74) はそれぞれ、場所と時間の副詞的要素が疑問詞となったものである。

(73) n̄ta-pe-k-eiōt bōk e tōn [2nd Perfect+S+V+Wh(=Ad)]
 converter(2nd Perfect)-the-your-father-S went to where
 「あなたの父はどこへ行ったか? (あなたの父が行ったのは、どこか?)」

(74) n̄ta-k-ouōh h̄n tei-polis t̄nau [2nd Perfect+S+V+Wh(=Ad)]
 converter(2nd Perfect)-you-settled in this-town when

Wh 疑問文	Wh=S	Wh(=S)+V+O
	Wh=O	Wh(=O)+V+S
	Wh=Ad	Wh(=Ad)+V+S+O

(2) エジプト・アラビア語（カイロ方言）の語順

基本語順	S+V+O	
話題化	T(=S)+V+O / T(=O)+S+Vp	
焦点化	da+F(=S)+rel+V+O / da+F(=O)+rel+S+Vp	
Wh 疑問文	Wh=S	Wh(=S)+V+O
		Wh(=S)+rel+V+O
	Wh=O	S+V+Wh(=O)
		Wh(=O)+rel+S+Vp
	Wh=Ad	where S+V+O+Wh(=Ad) (より自然あるいは無標)
		Wh(=Ad)+S+V+O (頻度が非常に低い)
	when	S+V+O+Wh(=Ad) (より焦点化)
		Wh(=Ad)+S+V+O
	why	S+V+O+Wh(=Ad) (多分より焦点化)
		Wh(=Ad)+S+V+O
	how	S+V+O+Wh(=Ad) (多分より焦点化)
		Wh(=Ad)+S+V+O

(3) コプト語（Sahidic）の語順

(cf. 2nd con= 第2形の converter; 2nd rel= 関係詞の第2形)

基本語順	S+V+O	
話題化	T(=S)+V+O / T(=O)+S+Vp	
右方転移	V+(O)+nči+S(=F)	
焦点化	F(=S)+2nd rel+pV+O / F(=O)+2nd rel+S+Vp	
Wh 疑問文	Wh=S	2nd con+Wh(=S)+V+O (頻度が非常に低い)
		Wh(=S)+2nd rel+pV+O (より焦点化)
	Wh=O	2nd con+S+V+Wh(=O) (頻度が非常に低い)
		Wh(=O)+2nd rel+S+Vp (より焦点化)
	Wh=Ad	where 2nd con+S+V+O+Wh(=Ad) (通常文で焦点化)
	when	2nd con+S+V+O+Wh(=Ad) (通常文で焦点化)
	why	2nd con+S+V+O+Wh(=Ad) (多分より焦点化)

Wh(=Ad)+S+V+O (より自然で頻度が高い)

how 2nd con+S+V+O+Wh(=Ad) (多分より焦点化)

Wh(=Ad)+S+V+O (より自然で頻度が高い)

これらのスキームを一見ただけでも、基本語順、話題化、焦点化の点で、エジプト・アラビア語は古典アラビア語よりもコプト語に似ていることがわかる。

ただし、ここで注意すべき点は、英語と古典アラビア語を比較すると、エジプト・アラビア語の語順規則は英語の方に似ていると言えることからわかるように、エジプト・アラビア語の基本語順、話題化、焦点化における統語規則のあり方は、基本語順がSVOである言語の一般的な類型的特徴とも考えられる。これは、エジプト・アラビア語だけでなく、VSOからSVO言語へと変化している現代アラビア語方言全体についても当てはまる統語特徴でもある。その意味で、基本語順ならびに話題化や焦点化に関する統語規則に関して、SVO言語であるコプト語からエジプト・アラビア語に対する影響があったかどうかは判断が難しいと言わざるをえない。

ただし、Wh疑問文の語順に関しては、エジプト・アラビア語は少なくとも以下のような三つの点においてコプト語により近いと言えるだろう。(1) 主語と目的語を疑問詞にする場合とそれ以外の副詞的要素を疑問詞にする場合は、どちらの言語も異なった扱いになっているだけでなく、関係詞を使うか使わないかという点においても同じである。(2) エジプト・アラビア語の場合、焦点化の程度において主語や目的語のWh疑問文と副詞的要素のWh疑問文では、前者が文頭に疑問詞を置く場合、後者が文末(Wh-in-situ)に疑問詞を置く場合に、それぞれ強調されていることが観察されたが、コプト語においても同様の傾向が見られる。(3) 副詞的要素がWh疑問詞となる場合、エジプト・アラビア語では場所や時間の疑問詞とそれ以外の理由や方法の疑問詞では生起頻度や統語的分布、さらには語用論的機能の点において若干の相違が観察された。コプト語においても対応する疑問詞については同様の特徴を持っており、この点においてエジプト・アラビア語の特徴は古典アラビア語からの自然な通時的統語変化の結果であるとみなすことは困難であり、コプト語からの影響とみなす方がより妥当である。

エジプト・アラビア語の疑問詞形に関する内的再構やエジプト・アラビア語とコプト語の統語規則の比較に基づいて、古典アラビア語と類似した段階からコプト語の影響を受けて現代エジプト・アラビア語へと至る通時変化を可能にするためには、理論上は次のようなエジプト・アラビア語(カイロ方言)の仮説的段階を再構できる。

(4) エジプト・アラビア語の Wh 疑問文の仮説的段階

Wh=S	Who[=*mīn]+V+O
	Who[=*mīn]+(rel)+V+O (焦点化)
	What[=*ē(h)]+V+O
	What[=*ēš]+(rel)+V+O (焦点化)
Wh=O	S+V+Whom[=*mīn]
	Whom[=*mīn]+(rel)+S+Vp (焦点化)
	S+V+What[=*ē(h)]
	What[=*ēš]+(rel)+S+Vp (焦点化)
Wh=Ad	where S+V+O+Where[=*fēn]
	when S+V+O+When[=*imta]
	why Why[=*lēš]+S+V+O (より頻度が高い)
	S+V+O+Why[=*lē(h)]
	how How[=*izzay]+S+V+O (より頻度が高い)
	S+V+O+How[=*izzay]

7.2 言語史的証拠

アラビア語史の研究では、実際に話されていた言語（方言）の資料がきわめて少ないという共通の問題がある。このためもあって、前節で提唱したような仮説的段階にあたるエジプト・アラビア語の通時的段階を実証することは難しいが、ユダヤ・アラビア語などの断片的な証拠を提出することはできる。

(1) 最初の証拠は、Wh 疑問詞の /ēš/ と /ē/ の通時変化に関わる事実である。以下に通時的資料として挙げる①～⑦の生起例からもわかるように、/ēš/ あるいはそれに近い変異形はアラビア語の歴史において比較的初期の段階から在証されている。ほとんど全ての生起例において、/ēš/ は文頭に使われるのが普通である。一方、/ēš/ の語末子音が脱落した形式と考えられる /ē(h)/ については、通時的な証拠から比較的後期の段階になって出現したものと見なすことができる。

/ēš/ と /ē(h)/ の用例に関しては、④の資料にあるシルビーニーが 17 世紀ごろのエジプト・アラビア語に関する有益なデータを提供している。シルビーニーは、ナイル川デルタ地方の農民が作った口語詩を風刺的に取り上げており²⁶⁾、そのデータからは都市部方言というよりは農村地方の方言を再構することができる。デーヴィスの研究によれば (Davies 1981)、/ēš/ は文頭へ前置され、/ē(h)/ は文末に後置される傾向にあり、

両者は生起する統語環境において一種の相補的分布をなしている。*/eš/* と */ē(h)/* に関する状況は、*/lēs/* と */lē(h)/* の関係にもあてはまる。シルビーニーのデータから再構できるこれらの疑問詞の統語特徴は、先に提示した仮説的段階の状況に近いと言える。

(2) 第二の証拠は、*/eš/* の統語機能に関わるものである。すでに指摘したように、*/eš/* は語源的には */ayyu šayyin/* から派生したと推定されるが、コプト語の統語規則の影響を考えるうえで、②の資料にあげたコプト文字によるエジプト・アラビア語テキストはきわめて示唆的なデータを提供している。同資料は13世紀ないし14世紀にコプト教徒によって書かれた宗教関連の文書であるが、非常にめずらしいことにコプト文字を使って、当時の口語に近いアラビア語で書かれている。先に議論したように、エジプトの都市部では11世紀、地方では12世紀（上エジプトなど一部の地域では遅くとも14世紀）までにはアラビア語化が浸透し、アラビア語がほとんどのエジプト人の母語となっていたと推定される。同資料は、コプト語を読み書きに使用していたコプト教徒が、自分たちに馴染み深いコプト文字を用いて、すでにコプト語を話さなくなった人びとを対象として、彼らにとって理解しやすい（口語）アラビア語で書き記したものであると推定される。

(a) および (b) の例文中に生起する */ei šei/* ならびにその短縮形である */eiš/* は、文頭に移動した形で使用されている。特にここでは (c) のつづられ方が興味深く、*/le ei šeiθehzen/* というように、*/le ei š/* (< **li-ayyi šayyin* cf. */lēs/*) の語末の */š/* が後続の動詞といっしょに一語として表記されている。この */š/* は、コプト語の強調構文（分裂文）や Wh 疑問文に現れる関係詞（第2形）と同じ統語機能をもっていると解釈できるならば、かつてはコプト語話者であった同テキストの書き手が、コプト語の統語パターンとの類推からエジプト・アラビア語の */eš/* とそれに類する疑問詞構文を統語的に再解釈したもの、あるいは、再解釈に応じた形で行われていた当時のコプト教徒のエジプト・アラビア語の発音を、当時の実際の表現に近いように書き記したものと考えた方がいいだろう。その意味では、コプト語話者がエジプト・アラビア語を話すようになっていったときに、すでにアラブ人が使用していた口語アラビア語に対して、どのような言語的対応を行なったかということに関する重要なデータとなる。

(3) 第三の証拠は、すでに議論した */izzay/* と */imta/* の語源と関係してくる。先に提示した仮説的段階の語順パターンによれば、*/izzay/* は文頭に移動して使われることが普通であり、一方の */imta/* は移動せずに文末で使われることが普通であるとされる。このことは、前者の */izzay/* が語源的に */eš/* との複合語であること、また後者の */imta/* が同じく語源的に */ē(h)/* との複合語であることと整合している。場所の疑問詞 */fēn/* に

については語源的解釈に問題があるが、/ayyin/との複合語という考えをとれば、この場合も移動せずに文末に生起するという仮説的段階のパターンと整合することになる。

8 おわりに

Wh 疑問文の語順に関しては、古典アラビア語に代表される古代アラビア語の段階から現代のエジプト・アラビア語（カイロ方言）の段階への自然な通時的統語変化を想定することは困難であり、コプト語の影響を考慮することでより整合的な説明が可能であった。ただし、エジプト・アラビア語の語順変化においてコプト語が独占的に影響をあたえたわけではなく、古典アラビア語にみられるような基本語順 VSO から、現代エジプト・アラビア語をふくむ多くのアラビア語諸方言にみられるような基本語順 SVO へ変化するなかで、話題化や焦点化という統語規則の面であらたな統語構造が必要になってきたときに、特にエジプト・アラビア語の場合はコプト語の統語規則が当該の言語変化を促進させたと考えた方が実際の言語事実に近いであろう。

Wh 疑問文の語順をめぐる様々な統語的特徴の観察から、エジプト・アラビア語の Wh 疑問文の語順について理論上の仮説的段階を想定したが、現代エジプト・アラビア語は仮説的段階におけるより頻度の高い語順パターンを一般化した結果（あるいは、している過程）であると見なすことができる。疑問詞が移動しない Wh-in-situ 疑問文の語順は、語順において比較的自由度の高い副詞的要素の疑問詞から発達し、その後主語や目的語の疑問詞へと拡大していったと考えられる。したがって、主語や目的語をめぐる Wh-in-situ 疑問文は比較的新しい発達であると考えられるならば、すでに議論したように、エジプト・アラビア語の Wh-in-situ 疑問文が、「島の制約」などの統語環境で異なった特徴をみせることも説明できるだろう。

少なくとも Wh 疑問文の語順変化に関しては、コプト語からの影響は、コプト教徒が比較的多く住んでいたナイル川デルタ地域などの地方農村部で始まり、特に 15 世紀以降になって農村部からカイロなどの都市部への人口流入が激しくなるにつれて、カイロ方言などの都市部方言にも拡がっていったと推定される。このように考えると、かつての都市部の古い方言特徴を残している保守的なユダヤ教徒方言のなかに、より古い段階の統語パターンが保持されていることに関しても整合的な説明が可能となる。

補遺： エジプト・アラビア語の Wh 疑問詞に関する通時的データ

① 12～13世紀：カイロのユダヤ・アラビア語 (Blau 1981; Blau and Hopkins 1985)²⁷⁾

- (a) 'lm' l d' 'ady 'ndy 'bqyhy lmn
- (b) 'nt zr't 'yy šgr
- (c) min y'iqeni
- (d) 'eš 'ale(y)k

② 13～14世紀：コプト文字によるアラビア語 (Sobhy 1926; Blau 1979)

- (a) ei šei esnah
- (b) men-ejl-eiš
- (c) le ei šeithezzen elledi iezlemek
- (d) me hou essohoud ike fauq ie epi
- (e) mede thenzor ie epene
- (f) kheif hai ………
- (g) ile ein themzi
- (h) lem [de?] lem thikaz[ni]

③ 16～17世紀：カイロのユダヤ・アラビア語 (Harry 1987, 1992; 西尾 1991)

- (a) 'kbrwny 'nd myn kwntw mkbyyn
- (b) fy byt myn kwntw

④ 17世紀：ナイル川デルタ農村方言 (シルビーニー) (Davies 1981)

- (a) 'yš (')š'bk
- (b) m' b' 'rf byqwlw 'yš
- (c) btbky lyh

カイロのユダヤ・アラビア語 (Blanc 1981; Goitein 1972)

- (a) 'ayš dāyir ti'mil hina
- (b) 'yyš lk s' 'dh tnzwrh' fl ryf

⑤ 18世紀：カイロ方言 (ニープールの旅行記 cf. Blanc 1981)

- (a) fēn
- (b) äisch hâlkom

⑥ 19～20世紀：カイロ方言 (Willmore 1901)

- (a) min darabatak / darabatak min
- (b) ēh qâl lak / ēh illi qâl lak²⁸⁾

- (c) “...this[=first in the sentence] is invariably the position of êsh...”
- ⑦ 20 世紀：カイロのユダヤ・アラビア語 (Non-Standard Cairene Arabic) (Blanc 1974)
- (a) “The NSC forms are, as in the older usage, preposed...”
- (b) “êš is common, also lēš (though less common)”
- (c) kīf ne’daru ne‘melu ḥāga zayye-di
- (d) “The use of the twin sets ’ē and ’ēš, lē and lēš, kīf and ezzāy, is attested down to the end of the last century with lēš being the first to go, then kīf, ’ēš now moribund.”

注

- 1) 本稿は、Word order and word order change of Wh-questions in Egyptian Arabic: the Coptic substratum reconsidered. In J. Cremona, C. Holes, G. Khan eds., *Proceedings of the 2nd International Conference of L’Association Internationale pour La Dialectologie Arabe*. Cambridge: Cambridge University Press, 1996, pp. 171–179. では詳細に議論できなかった内容を加えて大幅に書き改めた。日本語による論考（京都大学大学院文学研究科に提出した博士論文『ジバリー・アラビア語（エジプト・シナイ半島南部）の言語人類学的研究』所収）に加筆・修正をさらに施したものである。また本稿は、科学研究費補助金による基盤研究（S）「アラビアンナイトの形成過程とオリエンタリズムの文学空間創出メカニズムの解明」（代表 西尾哲夫、平成 18～22 年度、課題番号 18102001）の研究成果の一部である。
- 2) コプトの人口を 2,400 万人とする研究者もあるが、少なくとも征服初期においてはアラビア語話者とコプト語話者の人口にはかなりの差があったことには違いない。
- 3) イラクではバスラが 635 年に、クーファが 638 年に軍事前線都市として建設された。初期の人口はバスラが約 1,000、クーファが約 20,000 で、征服された住民の多くはイラン系の言語を話していた (Donner 1981: 226ff)。またシリアでも、大部分のアラブ人は地方の農村部よりも都市に住みついた。都市部の住民の中には、征服とともに逃げたものもいたが、農村部の住民には残ったものが多かった。したがって、都市部では土着の住民との間に接触が起こったが、農村部では住みわけが比較的是っきりしていた。推定人口比は、アラブ人が 20 万から 40 万人、非アラブ人が 400 万人程度であった (Poliak 1938: 43ff)。住民の多くは、系統的にも言語構造的にもアラビア語に近いアラム語（あるいはシリア語）を話しており、一部の上層階級ではギリシア語が使われていた。また、アラビア語を話すキリスト教徒の住民もいた。北アフリカ地域（マグリブ）についても、基本的にはカイラワン（670 年建設）などの都市部に定住した。同市の初期人口数は 15 万人程度と推定されるが、このような状況は、11 世紀に起こった、アラビア半島からのヒラルル部族やスライム部族の大規模な移住まで続いた。一説によれば、両部族の移住人口は約 100 万人であり、当時の北アフリカの総人口はおよそ 500 万人であったとされる。住民の大部分はベルベル系の言語を話していた (Versteegh 1984: 64)。ちなみに、征服初期の時代には、ラテン語の一方言を使う住民が残存していたらしい。
- 4) たとえば、都市部の Bilbays に 3,000 家族が移住したという記録がある (Donner 1981)。ただし、最も初期の段階においては、軍隊は基本的に兵士の妻や家族を伴わず、現地において啓典の民に属するキリスト教徒などの女性と結婚した者が多かった。
- 5) イスラム征服の初期のころは、コプト教の聖職者たちは通訳を介してアラブ人征服者と会話をしていたが、10 世紀のコプト教聖職者セヴェルス (Eshmunein the Severus) が、コプト教徒の大半はコプト語やギリシア語を理解できず、アラビア語しか話せなかったと言って嘆いているように、アラビア語化はこの頃までにはかなり進んでいた (Versteegh 1997: 95)。
- 6) 最近、シナイ半島南部のトゥール遺跡から発掘された考古資料の中から、コプト語数字を使用した 16 世紀のアラビア語商業文書が発見された。これによると、コプト語の限定的使用は後代まで行われていた可能性もある (Kawatoko 1992)。

- 7) 現在では典礼用語としてだけでなく、コプト語教育も行われており、新たなコプト語復興の動きもある。
- 8) シュテルンによるコプト語の化学文書の研究のなかで、初めてアラビア語へのコプト語の影響が言及されている (Stern 1885: 119)。
- 9) アラブ古典文法の考え方では、アラビア語諸方言の特異さとは、古典アラビア語が変化あるいは退化したものであり、アラブの大征服によって占領された地域の土着言語の影響を受けて、次第に規範的言語から崩れていったものであるとされる。アラブ古典文法学者のなかには、各地の言葉の乱れについて記述し、lahn al-'amma (「民衆の言語誤用」の意味) と一般によばれるジャンルの記述を残した者もいるが、彼らの関心があくまで規範文法を確立することにあり、方言自体を記述することになかったことや、またアラビア語以外の言語の体系的な記述にはほとんど学問的関心を持たなかったこともあり、エジプト方言の特異性について記述を行なったとしても、コプト語との関連で議論を行なうという態度はなかった。
- 10) ただし、これらのなかで (4) についてはピシャーイーも可能性を指摘しているのみで、コプト語からの影響については否定的である。
- 11) エジプトにおけるアラビア語方言の最初の総合的文法書を書いたシュピッタ・ベイも、特定の言語現象について議論しているわけではないが、コプト語からの影響については否定的な見解を述べている (Spitta-Bey 1880)。ただし、このような現地のエジプト人学者たちの見解には、コプト教徒とイスラム教徒の関係をめぐる政治的な態度が無意識であれ影を落としているということに留意すべきである (サーレ 1998; 1999)。
- 12) 実際に話されていた口語の資料がほとんどないために、アラビア語の通時的研究はこれまでにあまり行なわれてこなかったが、エジプト・アラビア語に関してはユダヤ・アラビア語文献やコプト文字アラビア語文献などを利用することができる。
- 13) 例えば、現代アラビア語諸方言の接尾人称代名詞形の比較から、古典アラビア語の体系とは異なる体系が再構できる (西尾 1986)。
- 14) ソブヒーは、エジプト・アラビア語の /'es/ がコプト語の /as/ に由来すると見なしている。コプト語の影響が考えられないエジプト以外の他の地域の方言にも /'es/ と同様の形式が在証されることから、両者の間に語源的な関係はない (Sobhi 1950: 4)。
- 15) 方言によっては、T+Vp+S の語順になる。前置詞句のなかの語も話題化によって文頭に移動し、再叙的な接尾代名詞 (resumptive pronoun) が現れる。尚、現れた再叙的な接尾代名詞を、Vp のように表示する。
- 16) 主語が話題化された場合に再叙的な代名詞化が起こることもある。
- 17) 現代標準アラビア語でも、口語の「da~illi」構文に相当する関係詞を使った強調構文を使う場合もあるが、古典アラビア語には本来存在しない構文であり、現代口語表現の影響あるいは英語等の表現の借用とみなした方がよいであろう。
- 18) エジプト・アラビア語以外の他のアラビア語諸方言における分裂文の構造や形式から判断すると、同様の表現形式が各方言で並行的に発達してきたと言える。
- 19) ただし、例文 (16) の文法的許容度に関する判断では、インフォーマントごとにかかなりのゆれがある。一般的に言って、文語的な現代標準アラビア語 (フスハー) をよく使う年配層の人ほど許容度が低くなる傾向にある (例文 (16) をまったくの非文と判断する場合も多い)。また例文 (16) を認める場合でも、文頭に代名詞の /huwwa/ を入れた方がより自然であるという判断をする。

(16a) huwwa zēnab, mīn qarab-ha fi-l-madrasa imbāriḥ
この文頭の /huwwa/ は本来通時的には三人称男性単数 (つまり「彼」に相当) の独立人称代名詞であるが、現代エジプト・アラビア語 (特にカイロ方言) のより口語的な表現では、疑問文のマーカールとなりつつある。そのような社会方言の話者の場合、例文 (13) も文頭に /huwwa/ を付けるとより自然になる。

(13a) huwwa aḥmad qarab mīn fi-l-madrasa imbāriḥ
- 20) 例文 (34) に関しては、実際の会話ではよく使われているが、より保守的な方言話者のなかには許容度がおちると判断する場合もある。
- 21) インフォーマントによっては (特に若年層の場合)、たとえば例文 (37) では /huwwa/ が付加されると許容度が高くなる傾向にある。
- 22) 以下の例文の許容度に関しても、特に保守的な方言の話者と革新的な方言を使う若年層の話者とは、/mīn/ や /'e(h)/ の場合以上にゆれが観察される。

- 23) 例文 (40) に関しては、保守的な方言話者と革新的な方言話者の双方が、どちらも一様に許容できるかどうかの判断ではためらいを見せた。
- 24) 次にあげる他の副詞的な疑問詞の場合、例文 (45) と同種の語順をもった疑問文については、すべてのインフォーマントが完全に文法的であると判断するのに対して、ここでの /fən/ を使った疑問文の場合は、完全に非文と判断されることはないもの、インフォーマントごとに許容度に関する判断が若干分かれる。一般的に言って、例文 (40) と (45) のように、/fən/ を文頭へ移動した文については、より古い方言を使う保守的な話者よりも若年層の話者の方が、文法的な許容度がより高いと判断する傾向にある。本文で述べたような例文 (41) についての観察もそれを裏付けている。ただし、疑問詞の文頭への移動に関する文法規則を話し言葉である口語方言 (アンミーヤ) について考察するにあたっては、標準的な文語の現代標準アラビア語 (フスハー) からの文法的干渉を問題にする必要があるだけでなく、都市方言としての現代カイロ方言 (より一般的に現代エジプト・アラビア語) の場合には、都市の教育を受けた中間層を中心に威信の言語として成立しつつある都市部標準アラビア語からの文法的干渉をも考慮する必要がある。
- 25) Wh 疑問文に関して言えば、保守的な古いタイプの方言の場合には VSO 語順を想定した方がよい理由としては、以下の例文のなかで文頭に疑問詞が移動した方について、保守的な古いタイプの方言の話者が文法的に容認しないことが挙げられる (Wahba 1984)。
- (1-a) aḥmad itʔatal
Ahmad-S was-killed
「アフマドは殺された」
- (1-b) mīn itʔatal (保守的な話者は??)
who-S was-killed
「誰が殺された?」
- (2-a) ʔē(h) ḥaṣal li-aḥmad (保守的な話者は??)
what-S happened to-Ahmad
「アフマドに何が起こったか?」
- (2-b) ḥaṣal ʔē(h) li-aḥmad
happened what-S to-Ahmad
「アフマドに何が起こったか?」
- (2-c) ʔē(h) illi ḥaṣal li-aḥmad
what-S rel happened to-Ahmad
「アフマドに起こったのは、何か?」
- 保守的な話者の場合、基本語順が VSO であるとするれば、文頭の位置は主語の位置というよりも話題化された語の移動する位置という性格が強く、受動文の主語は話題化された語であること (動作者が不明の場合も使われることに注意) から、例文 (1-b) は文法的に容認できないと判断される。例文 (2-a) についても同様であり、保守的方言の話者にとっては、例文 (2-b) の方が、Wh-in-situ 疑問文として疑問詞が移動しない、無標の疑問文であると判断されるのである。
- 26) シルビーニー自身も下エジプトのナイル川デルタ地方北東、地中海に面したダミエッタの出身である。
- 27) (a) と (b) の例では疑問詞が文末に置かれているが、この文は通常の疑問文ではなく、相手が言った内容をオウム返しに尋ねるエコークエスチョンであり、疑問詞の語順に関する通時的データとしては問題が残る。
- 28) “Eh is only placed at the beginning when considerable stress is laid on it, the relative illi being often inserted…” (Willmore 1901: 267)

文 献

Anawati, Georges C.

- 1975 Factors and effects of Arabization and Islamization in Medieval Egypt and Syria. In Speros Vryonis Jr (ed.) *Islam and Cultural Change in the Middle Ages*. (Fourth Giorgio Levi della

- Vida Biennial Conference), pp. 17–41. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Behnstedt, Peter
 1981 Weitere koptische Lehnwörter im Ägyptisch-Arabischen. *Die Welt des Orients* 12: 82–98.
- Behnstedt, Peter and Manfred Woidich
 1985–1999 *Die ägyptisch-arabischen Dialekte*. I–V, Wiesbaden: L. Reichert.
- Bishai, Wilson B.
 1960 Notes on the Coptic substratum in Egyptian Arabic. *Journal of the American Oriental Society* 80: 225–229.
 1961 Nature and extent of Coptic phonological influence on Egyptian Arabic. *Journal of Semitic Studies* 6: 175–182.
 1962 Coptic grammatical influence on Egyptian Arabic. *Journal of the American Oriental Society* 82: 285–289.
 1963 The transition from Coptic to Arabic. *Muslim World* 53: 145–150.
 1964 Coptic lexical influence on Egyptian Arabic. *Journal of Near Eastern Studies* 23: 39–47.
- Blanc, Haim
 1974 The nekteb-nektebu imperfect in a variety of Cairene Arabic. *Israel Oriental Studies* IV: 206–226.
 1981 Egyptian Arabic in the Seventeenth Century: Notes on the Judeo-Arabic passages of *Darxe No'am* (Venice 1697). In S. Morag, I. Ben-Ami and N. Stillman (eds.) *Studies in Judaism and Islam Presented to Shelomo Dov Goitein*, pp. 185–202. Jerusalem: The Magnes Press.
 1985 Egyptian Judeo-Arabic: More on the subject of R. Mordekhai b. Yehuda Ha-Levi's *Sefer Darkhe No'am*. *Sefunot* n.s. 3/18, pp. 299–314. [in Hebrew]
- Blau, Joshua
 1979 Some observations on a Middle Arabic Egyptian text in Coptic characters. *Jerusalem Studies in Arabic and Islam* 1: 215–262.
 1981 *The Emergence and Linguistic Background of Judaeo-Arabic*. 2nd ed. Jerusalem: Ben-Zvi Institute for the Study of Jewish Communities in the East.
 1988 *Studies in Middle Arabic and its Judaeo-Arabic Variety*. Jerusalem: The Magnes Press.
- Blau, Joshua and Simon Hopkins
 1985 A vocalized Judaeo-Arabic letter from the Cairo Geniza. *Jerusalem Studies in Arabic and Islam* 6: 417–476.
- Cohen, David
 1970 Koinè, langues communes et dialects arabes. In David Cohen, *Etudes de linguistique sémitique et arabe*, pp. 105–125. The Hague and Paris: Mouton.
- Davies, H. T.
 1981 *Seventeenth-Century Egyptian Arabic: A Profile of the Colloquial Material in Yūsuf al-Shirbīnī's 'Hazz al-Quḥūf fī Šarḥ Qaṣīd Abī Sādūf'*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- Diem, Werner
 1979 Studien zur Frage des Substrats im Arabischen. *Der Islam* 56: 12–80.
- Donner, Fred McGraw
 1981 *The Early Islamic Conquests*. Princeton: Princeton University Press.
- Doss, Madiha
 1979 The position of the demonstrative *da*, *di* in Egyptian Arabic: a diachronic inquiry. *Annales Isalmiques* 15: 349–357.
- Farghal, M. A.
 1986 *The Syntax of Wh-questions and Related Matters in Arabic*. Ph.D. dissertation, Indiana University.
- Ferguson, Ch.
 1959a Diglossia. *Word* 15: 325–340.
 1959b The Arabic koine. *Language* 25: 616–630.
- Fischer, A.
 1905 Arab. 'ayš. *Zeitschrift der deutschen morgenländischen Gesellschaft* 59: 807–818.

- Fischer, Wolfdietrich
1959 *Die demonstrativen Bildungen der neuarabischen Dialekte*. The Hague: Mouton.
- Fischer, Wolfdietrich and Otto Jastow
1980 *Handbuch der arabischen Dialekte*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Galtier, E.
1902 De l'influence de copte sur l'arabe d'Égypte. *Bulletin de l'Institut Français d'Archéologie Orientale* 2: 212–216.
- Goitein, Shlomo Dov
1972 Townsman and Fellah: a Geniza text from the seventeenth century. *Asian and African Studies* 8: 257–261.
- Hary, Benjamin H.
1987 *Judeo-Arabic, Written and Spoken in Egypt in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
1992 *Multiglossia in Judeo-Arabic*. Leiden: E.J. Brill.
- Hinds, Martin and El-Said Badawi
1986 *A Dictionary of Egyptian Arabic*. Beirut: Librairie du Liban.
- Holm, John
2000 *An Introduction to Pidgins and Creoles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 池田 修
1985 「エジプトにおけるアラビア語の歴史」『イスラム世界』23/24: 1–15.
- Ishāq, E. M.
1975 *The Phonetics and Phonology of the Bohairic Dialect of Coptic and the Survival of Coptic Words in the Colloquial and Classical Arabic of Egypt and of Coptic Grammatical Constructions in Colloquial Egyptian Arabic*. Ph.D. dissertation, University of Oxford.
- Kawatoko, Mutsuo
1992 On the use of Coptic numerals in Egypt in the 16th Century. *Orient* 28: 58–74.
- Lambdin, Thomas O.
1982 *Introduction to Sahidic Coptic*. Macon: Mercer University Press.
- Littmann, Enno
1902 Koptischen Einfluß in Ägyptisch-Arabischen. *Zeitschrift der deutschen morgenländischen Gesellschaft* 56: 681–684.
- Loprieno, Antonio
1995 *Ancient Egyptian: A Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Munzel, K.
1950 Zur Wortstellung der Ergänzungsfragen in Arabischen. *Zeitschrift der deutschen morgenländischen Gesellschaft* 100: 566–576.
- Myers-Scotton, Carol
2002 *Contact Linguistics: Bilingual Encounters and Grammatical Outcomes*. Oxford: Oxford University Press.
- 西尾哲夫
1986 On the pronominal suffixes in Proto-Colloquial Arabic. 『言語学研究 (Linguistic Research)』5: 1–24.
1991 「16～17世紀のアラビア語エジプト方言——大英図書館蔵ゲニザ文書 Or.7768 を資料として」『オリエント』34 (2): 54–73.
1996 Word order and word order change of Wh-questions in Egyptian Arabic: the Coptic substratum reconsidered. In J. Cremona, C. Holes, G. Khan (eds.) *Proceedings of the 2nd International Conference of L'Association Internationale pour La Dialectologie Arabe*, pp. 171–179. Cambridge: Cambridge University Press.
- Obler, Loraine K.
1975 *Reflexes of Classical Arabic šay'un in the Dialects: A Study in Patterns of Language Change*. Ph.D. dissertation. University of Michigan.
1990 Reflexes of Classical Arabic šay'un 'thing' in the modern dialects: Synthetic forms in language change. In James A. Bellamy (ed.) *Studies in Near Eastern Culture and History*

- in memory of Ernest T. Abdel-Massih*. (Michigan Series on the Middle East No. 2), pp. 132–152. Ann Arbor: Center for Near Eastern and North African Studies, University of Michigan.
- O’Leary, De Lacy
1934 Notes on the Coptic language. *Orientalia* 3: 243–258.
- Palva, Heikki
1969 Notes on the alleged Coptic morphological influence on Egyptian Arabic. *Orientalia Suecana* 18: 128–136.
- Petráček, Karel
1956 Zum arabischen Dialekte von Ägypten: Zum koptischen Einfluß im Arabischen. *Archiv Orientální* 24: 591–595.
- Poliak, A. N.
1938 L’arabisation de l’Orient sémitique. *Revue des Etudes Islamique* 12: 35–63.
- Polotsky, Hans Jakob
1960 The Coptic conjugation system. *Orientalia* 29: 392–422.
1962 Nominalsatz und Cleft Sentence im Koptischen. *Orientalia* 27: 413–430.
- Praetorius, F.
1901 Koptischen Spuren in der ägyptisch-arabischen Grammatik. *Zeitschrift der deutschen morgenländischen Gesellschaft* 55: 145–147.
- Prince, Dyneley
1902 The modern pronunciation of Coptic in the Mass. *Journal of the American Oriental Society* 23: 304–306.
- サーレ・アーデル・アミン
1998 「一九世紀末におけるエジプトの「民衆語」認識——エジプトにおける言語ナショナリズムの前夜（一八八〇～一九〇〇）」『日本中東学会年報』13: 287–304.
1999 『エジプトの言語ナショナリズムと国語意識——日本の「国語形成」を念頭において』東京：三元社。
- Shisha-Halevy, A.
1986 *Coptic Grammatical Categories*. Roma: Pontificium Institutum Biblicum.
1988 *Coptic Grammatical Chrestomathy*. Leuven: Peeters.
- Sobhy, Georgy (Bey)
1926 Fragments of an Arabic ms. in Coptic script. In H.G. Evelyn White (ed.) *The Monasteries of the Wādi ‘n Natrān Part I, New Coptic Texts from the Monastery of Saint Macarius*, pp. 231–269. New York: The Metropolitan Museum of Art.
1950 *Common Words in the Spoken Arabic of Cairo, of Greek or Coptic Origin*. Cairo: Société d’Archéologie Copte.
- Spitta-Bey, Wilhelm
1880 *Grammatik des arabischen vulgärdialektes von Aegypten*. Leipzig.
- Stern, L.
1885 Fragment eines koptischen Tractales über Alchimie. *Zeitschrift für ägyptischen Sprache* 23: 117–119.
- Thomason, Sarah G.
2001 *Language Contact: An Introduction*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Thomason, Sarah G. and Terrence Kaufman
1988 *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics*. Berkeley, California: University of California Press.
- ‘Umar, ‘A. M.
1970 *Ta’rīkh al-Lughā al-‘Arabīya fī Miṣr*. al-Qāhira
- Versteegh, Kees
1984 *Pidginization and Creolization: The Case of Arabic*. Amsterdam: John Benjamins.
1997 *The Arabic Language*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Wahba, W.
1984 *Wh-Construction in Egyptian Arabic*. Ph.D. dissertation, University of Illinois.

西尾 エジプト・アラビア語のWh疑問文の語順と語順変化

Wahba, W. and M. Kenstowicz

1983 Wh-in-situ construction in Egyptian Arabic. *Current Approachs to African Linguistics 2*: 262–281.

Willmore, John Selden

1901 *The Spoken Arabic of Egypt*. London: David Nun.

Worrell, William H.

1934 *Coptic Sounds*. Ann Arbor: University of Michigan Press.

